

音楽と私

シニアアンサンブルあすなる 森 一

私の母は父が入り婿で家に来るまで上野音楽学校（現東京芸術大学）本科ピアノ科に在学していた。その関係で自宅の客間にはドイツ製のピアノ『フォイリッヒ』があり、私は幼い頃から身近にピアノに触れて遊んでいた。或る時、地元の徳島放送局J O X Kに演奏を依頼され、局からさし向けられたハイヤーで母が出かけて行った時、母親が急に偉くなった様に見えた。この頃から子供の私の意識のなかにピアノに対する憧憬の様なものが芽生えたように思う。

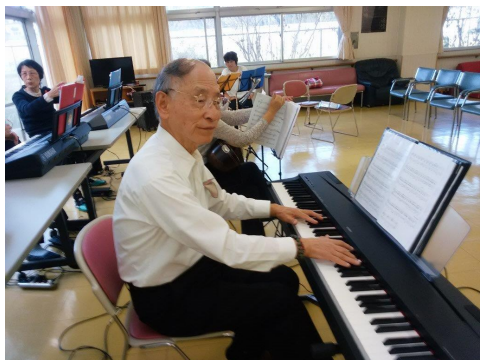
小学生時代は太平洋戦争中で音楽とは縁のない時代。そのうえ米軍のB 2 9爆撃機に襲われピアノは自宅と共に焼失した。

戦後の喰うや喰わずの時代にも母は音楽を忘れず、何処からか足踏み式のリードオルガンを調達してきて、十二畳一間の寄寓先に据えた。音楽やピアノに対する憧れが消えてなかった私はこのオルガンで練習し、一方で教会の日曜学校や礼拝時に賛美歌の演奏を手伝いながら他方で自分で作曲の真似事を始めていた。母は県立工業学校で臨時の音楽教師で稼ぐ一方、私の動きも見逃さず、何も云わずに楽典や和声学、楽式論（音楽形式）、対位法、音楽史など私の興味をひきそうな音楽書をそっと机の上に置いてくれた。

時は移り高校三年生、目指すは芸大作曲科かピアノ科。しかし当時の就職先は学校の音楽教師ぐらいしかなく父が反対。強行突破すれば兵糧攻めを覚悟せねばならぬ。そうこうする中に夏休みに入り事は急を要する事態に。私は仕方なく方向転換し、経済学部を目指すことにしたが、残りの準備期間が短く留意点を二つに絞った。一番目は得意科目だった数学と英語が重視されている大学。二番目は父には内緒だったが近くに音大があるところ。重点策が功を奏し入試を何とか現役でクリア出来た。私は当初の夢の実現を目指し早速行動開始。

まず近所の音大に友人を作る。対象はピアノ科と作曲科に在籍する学生。特にピアノを下宿に持ち込んでいる学生。私にとってはピアノが身近にあることが不可欠だった。入学した大学は音大ではないので、講堂の中のベヒシュタインのフルコン、中古ピアノが置かれていたクラブ活動の教室、構内に宿舎があるゼミナールの教授宅のピアノ等が数少ない身近にあるピアノであった。これ等を一つひとつ使用させてもらえる様に手を打っていった。

専攻の数理経済学や統計学などを真面目に勉強しながらもピアノや作曲の勉強も趣味として続けた。なにしろ隣の音大には専門家が大量にいるので指導者には事欠かなかった。



ぶじ卒業後、楽器メーカーに就職し、外見上、専攻と趣味が融合した様に見えるが、世の中はそれ程甘くない!! 国内海外での大半の勤務期間はピアノ演奏や作曲とは縁もゆかりもない販売網作りや維持等の業務に忙殺された。ただ休日や休暇中など自分の自由時間はピアノの練習等に当てることが出来た。アマチュアながらレパートリーもショパン、リストからドビュッシー、ラベルと拡げていった。変わったところではガーシュイン等も加わった。

退職後、第二の人生を歩むことになった私は縁があってシニアアンサンブルあすなるのピアノを手伝うことになり、大勢の仲間と一緒に幅広いジャンルの音楽を合奏する楽しさにピアノ独奏では得られない喜びを感じている昨今である。